

インドレポート：悠久の大地と仏教の未来

中学高校時代、私は社会科が好きでした。なかでも世界史と地理に興味があり、よく世界の都市や特色ある地域を地図上で探したものでした。そのなかで、インドについていえば中学、高校どちらの社会科の教科書にも白亜のタージマハールの写真が載っていました。広大な国土、デカン高原、象と牛とターバン姿、仏教発祥・・・これが私のイメージでした。

定年になると、私は世界の名作の舞台を訪ねる文学紀行に取り組んできましたが、アジアの作品はまだ扱っていません。そんななか、文学ではないけれど人間の生き方を説いた法華経、釈尊が悩める人間を救うために歩いたインドを訪ねることも、自分の仏教信仰と併せて意義深いことと思っていました。

10月初め。旅行社JTBが発表した「GOGOインド直行便5日間」にフリーの日もあることを知ると私はすぐに元の職場の親友と申し込んだのです。

11月11日午後5時過ぎ、成田空港を飛び立った全日空827便は翌12日の午前0時過ぎ、デリーのインディラ・ガンジー国際空港に到着しました。日本とインドとの間の時差は3時間半。深夜にもかかわらず空港内は賑やかで、入国審査は他の国並みだったものの税関の審査がほとんどないことには驚きました。更に驚いたのは国際空港の両替所が閉鎖していたことです。窓口には“Out of cash”といった掲示がありました。つまり「交換できるお金はありません」とのこと。後ほどのガイドの説明で事情がわかってきたのですが、インドの紙幣に大変化が起こっていたのです。インド滞在中ずっとそんな場面を体験してきたので、後の文中でも触れていきます。



そして空港の建物の外に出たときのもう一つの驚き。それは周辺のライトに照らされた光景がどこまでも灰色に覆われていたことです。宿泊ホテルに向かう観光バスに乗ったガイドの説明。

「皆さん驚いたでしょう？そう、デリーの空気汚染はときに北京を超えることもあるんです。人が増え、車が増え、産業が発達していく段階でこうした現象が起こってくる。マスクを持参された方はどうぞお使いください」。

こんな予期しなかった状況下でも、バスに乗り込むときに見上げた上空にスモッグに煙りながらも光っていた月を見たときは、なぜか郷愁を誘われたものです。「日本で見る月とおんなじだ。月はいつも地球を眺めているんだ！」

インド門

2日目はデリー市内の観光です。朝、念のためホテルの受付で両替を試みましたが、でも係が「交換できるルピーはまったくありません」とのにべない対応。バスで市内を巡るうちに何回も同じ情景に出会い納得しました。どの銀行の前にも50人、100人と長蛇の列が続いている。ガイドの説明によれば「2日前にモディ首相が突然宣言した。『500ルピーと1000ルピー札は一切使えなくなる』と。紙幣の偽造が多く、隣国からも偽札が入ってきている。ときには蛮勇を振るわないとインドはやっていけない。人々は不満ありながらも、事情がわかっているので黙って列に並んでいるんですよ」

この説明、帰国した11月23日付けの日本経済新聞で「真相・深層」とのコラムに取り上げられていました。

「インド高額紙幣、突如『無効』の力業」「不正蓄財にメス、庶民は喝采」といったタイトルと見出し。

記事は、インドのモディ政権は11月8日、突如として高額2紙幣の使用禁止を発表した。廃貨の対象となったのは500ルピー札（約800円）と1000ルピー札。背景には富裕層が節税対策に利用してきた現金による蓄財がある。その不正蓄財にメスを入れる荒療治が行われた、といった内容でした。

経済の専門紙です。きっと分析の通りでしょう。ではガイドの説明はどうなるのでしょうか。たぶん、こちらも真実ではあるでしょう。政府はいろんな形で国民に訴えていたのかもしれませんが。私もインドの経済取材に行ったわけでもないので、そのまま聞いていましたが、海外では一部の情報だけに頼っているとこんなことも起こる、といった警鐘かもしれません。

街に出ました。なんと多い人の波。圧倒されるような車の数。それが何車線もある広い道路を抜きつ抜かれつ走っている。「リクシャー」と呼ばれる緑と黄のツートンカラーの小型オート三輪車の後ろ座席には3人も5人も、ときに8人近くもが乗り込んでいる。なんとという雑踏、なんとという喧噪。でもそのなかに人々の生きる強いエネルギーが感じられてきます。

浅黒い肌。彫りの深い哲学的な顔。大きな目。日本にも滞在したことがあるというインド人ガイドはその大きな目をぐるぐる回しながら流ちょうな日本語でときに面白く解説しました。

「皆さんご覧になったでしょう？インド人は生きている。日本人は生かされている。そうじゃないですか？」

たしかに貧しくても逞しい子供達の目の輝きを見るとインド人は生きている。「生かされている」という言葉の裏には、社会保障が充実していて国が死ぬまで面倒を見てくれる日本といった意味合いを込めているようですが、この分析、それなりに納得できるような気がしました。

最初に訪れたのはインド門。高さ42メートル。第一次世界大戦で戦死したインド兵士の慰霊碑です。インドは戦後の独立を条件にイギリスに協力して参戦しましたが、大きな犠牲と引き替えの独立は実現しなかった。壁面には戦没者1万3500人の名前が刻まれています。白いユニフォームの儀礼兵がおり、近辺には大統領官邸や国会議事堂がある。道路もここから放射状に広がっていて、門はちょうどパリの凱旋門を思わせるような風情でした。

続いて訪れたのは、それぞれ世界遺産になっているフマユーン廟、クトゥブミナール、レッドフォートです。フマユーン廟も、高さ72メートルの尖塔のクトゥブミナールもイスラムの遺跡。レッドフォートは文字通り赤い砦でムガル帝国時代の面影が色濃く残っていました。

3日目は今回の旅行のハイライトでもあるタージマハール。デリーから観光バスで5時間のアグラーの街へ。1日1万人以上が訪れるというインド最大の観光地ですが、これは宮殿ではなくお墓なのです。ムガル帝国第5代皇帝が37歳で亡くなった妃を偲び、22年の歳月をかけて白大理石の世界一豪華な墓を作った。優雅さにおいては、インドイスラム建築の最高峰とも言われています。

入り口は押すな押すなの大混雑。入場するには空港のセキュリティチェックとほぼ同様の検査を受けなければなりません。入場を許されて門を歩いて行くと、美しい一直線の水路の向こうに白く輝いてそびえるタージマハールが見えてきました。建物の入り口には大変な数の観光客が並んでいましたが、入場料も高い外国人は別の入り口から優先して入れたのはラッキーでした。建物保護のため廟に入るの



タージマハール

には靴を脱いで裸足になるか、靴に保護のためのカバーを掛けなければなりません。

廟の中は空洞で中央の地下に妃の棺が安置されています。外から見ると高さ 67 メートルのドームが青空に映え、どの角度から見ても均整が取れたその姿はまさにイスラム建築の粋とも言えるでしょう。

その一方で、世界各地から貴重な石が取り寄せられ、職人が集められ、天文学的な費用をかけて建築されたという話に、この後に訪れたムガル帝国の権力の象徴アーグラ城、昨日訪れたデリーの世界遺産も同じような背景を持っていることに、当時の民衆の生活苦に思いを及ぼされる自分なものでした。



人なつっこい子供たち

いる主な宗教と言えば、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教、シク教、ジャイナ教等々があり、そのずっと後方に仏教がきています。

「ヒンズー」は「India」の語源でもあり、ヒンズー教とは「インド教」を意味している。イスラム教は 8 世紀頃から侵入したアラブ人によって伝わりはじめた。キリスト教はイギリスがインドを植民地として広めたというよりも 1 世紀からすでに伝えられていた、ということです。

でも私は、今回のインド訪問でフリーの最終日、インドの仏教団体の中心者の一人から話を聞くことができました。それによると、確かに歴史はそうだった。でもこの半世紀の間にインド人の間に仏教への関心がとても高まってきている。インドは今 IT 産業が大きく発展しつつある。人口はまもなく中国を抜き、やがて経済的にも世界のトップクラスに君臨してくるだろう。そんなインド社会の発展と符合するように仏教徒が増えている。宿命や業の存在を信ずるインド人にとって、生活と社会につながった仏教を「生きた宗教」として実感している、というのです。

私はそんな話を聞き、かいま見たデリーやアーグラの町、人々の逞しいエネルギー、子供達の目の輝き、IT 産業の発達、人口の右肩上がりの伸びと仏教再興隆の鼓動に「インドの時代の到来」を強く感じたのでした。



創価菩提樹園にある世界平和の碑

※ インドリポートについては「アルバム」のページに写真 40 枚あまりを載せております。